

◆ かつば民話シリーズ⑭ ◆

かつばのなみだ①



作:近藤せいけん



むかし昔、相模の国の厚木村を流れる、相模川にいたずら者のカッパが住んでいました。名前は太郎カッパと言ひ、相模川にかかる、もぐり橋の近くを寝ぐらにして、橋を渡る村人にいたずらをして、ひまをもてあましていました。

ある日のことです。夕暮れがちかずき、あたりが暗くなり始めたころ。

厚木村のほうから、にぎやかなかねや太鼓、笛の音と村人の楽しそうな声が聞こえてきました。太郎カッパは川岸にちかずき、土手の上からにぎやかそうな、広場のほうを見ました。淡い色のきれいなぼんぼりが灯り、高い舞台が設けられていました。その周りを村人が楽しそうに踊っていました。またたくさんの露店が立っていて、おいしそうな臭いが太郎カッパの所まで、とどいてきました。

「 ああ おれも村人と同じように、踊ったり、飲んだり、食べたりして楽しみたいなあ」

「あああ・・・ だめか・・・カッパでは相手にされない・・・」

「 おれ人間になれたら、いいのになあ・・・」

「 なぜ、おれは、カッパなんだ」

「神様はふこうへいだなあ～」

「それに、おれ今 一ぴき」

「 さびしいなあ・・・」

「いいな～人は」

太郎カッパはとぼとぼと、ねぐらもあるもぐり橋のほうにもどって行きました。
もぐり橋に座り、聞こえてくる、祭りの楽しそうな音色を聞いていました。

「 あああ～なんでカッパなんだ」

「人になりたいなあ～」

「自由に好きなところえ、好きな時間いける、人間がうらやましい」

太郎カッパは橋のふちに座り、足をばたばた、してくやしがっていました。

するとその時です、年老いた白ひげの人がこっことつえをついて、橋を渡ってきました。

背中をむけている太郎カッパのところで立ち止まりました。

太郎カッパは振り返りません。

じっとしていると、優しい声で

「 これこれ、そこのカッパ、そこで何をしておる」

「ずいぶんとさびしそうじゃな」

「 どうしたのじゃ・・・」

「ほっといてくれ」

「そうか・・・」

「それじゃ、行くとするか」

太郎カッパが振りかえった。

じいっと、その老人を見つめた。太郎カッパが口を開いて。

「おぬしは見かけぬ顔じゃな」

「どこの村の者か？」「どこから来たのか」

すると、白ひげの老人は手の平を高くあげ、一本の指を天高く指した。

「あそこ、からじゃ」
太郎カッパは天を見上げて、
「おぬしは空から来たのか？」
「空のどこからだ？」
老人は笑いながら、答えた。
「わあ ははは。天からよ」
「 え～天から来たのか？」
「どうやって・・・」
「 雲に乗ってじゃ」
「え～え、え。本当か～」
「おぬしは仙人（せんにな）様か」
「そうじゃよ」
「ヒゲ仙人じゃ」
「そうか、そうか、それじゃ、俺の願い、聞きとどけてくれますか」
「何じゃ。話してみよ」
「俺は孤児。いつも、一人で寂しい」
「何も楽しいことは無い」
「いつそのこと、人間になって、自由にあっちこっちいって、気ままに過ごしたい」
「村の人みたいに、祭りにいって踊ったり、おいしい物を食べたり、いろんな所、見て歩きたい」
」
「人間になりたい！」 「人にして下さい！」
「かっぱは寂しすぎる・・・」
じっと、白ひげ仙人はかっぱの話を聞いていた。
「そうか、そんなにかっぱがいやか」
「そんなに人になりたいか・・・」
「なりたい、人間になりたい！」
「どうか、人間にして下さい」
白ひげ仙人は目を閉じて、ふっと～考えた。
「さて、どうしようか・・・このかっぱの願い聞き届けてもよいが・・・」
「このかっぱのために、はたしてなるかな～あ・・・」
白ひげ仙人は目を開け、かっぱを見つめた。
「そうか、それほど言うならば、お前の願い聞き届けてもよいが」
「え～え、本当ですか！」 「やった、やったぞ」
「とうとう、俺は人間になれる、なんと幸せなんだ！」
白ひげ仙人は静かに太郎カッパに語りかけた。

「よいか、かっぱ、よく聞け。明日の朝、このもぐり橋に最初に朝日があたる時刻にこの場所にきよ。その時まで、お前の考えが変わらなければ、おまえの望みをかなえてあげる」

「明日まで、じっくり考えよ。さらばじゃ」

すると、突然、白ひげ仙人の姿は消えた。

太郎カッパは喜びのあまり、もぐり橋の上に両手を伸ばし、大の字に寝て天に向かい、大声出した。

「とうとう、やった！俺の長年の夢がかなう」

「運が向いてきた。明日だ、明日だ」

「人間になれるんだ」

翌日、朝日が昇る前から、もぐり橋で白ひげ仙人を待った。あたりがだんだん明るくなってきた。朝一番のまぶしい光が指して、太郎カッパの顔を照らした。その時である、突然、ぱあ〜つと白ひげ仙人が現れた。

「太郎かっぱ、どうじゃ、考えは変わらないか」 「人間になりたいか」

白ひげ仙人は静かに語りかけた。

「はい、どうしても、人間になりたい。考えは変わりません」

「そうか、それでは太郎カッパ、お前を人間にしてあげよう。」

「わあ、あ、本当ですね！わあはは、は、うれしい、うれしい」

「今すぐなれるのですね」

「そうせくな」

「太郎かっぱ、よく聞け」

「一つだけ、条件がある」

「え、条件ですって？」

「条件って、何です」

「それはなあ・・・」

「なみだじゃ」

「え、なみだですか？」

「そうじゃ、なみだじゃ。悲しいときに、泣く、なみだじゃ・・・」

「うれしいとき、かんげきしたとき、喜びのときに流す、はみだはよいが、苦しいとき、悲しいときに流すなみだじゃ」

「え、苦しいとき悲しいときの流すなみだですか？」

「そうじゃ、苦しいとき悲しいときに泣くまえぞ」

「え〜泣くとどうなりますか？」

「元のかっぱにもどるぞ」「それでも、よいか」

人間になりたい太郎カッパはすぐに、答えた。

「苦しいこと、悲しいことに会わなければいいんだ」

「はい、泣きません。楽しいバラ色の毎日を送ります」

「心配ありません」

「さようか・・・」

「そのかくごであれば、望どうりに人間に変えよう」

白ひげ仙人が長いつえを振った。

白い煙が吹き出し、太郎かっぱの全身が包まれた。しばらくして白い煙が薄くなり、太郎かっぱの全身が見えてきた。

頭のお皿も、背中のかうらもなくなり、とがっていた口も平らになり、普通の男の人間に変身していた。

太郎かっぱは川面に自分の全身を映して見た。

「わ、わ～ああ、人間になった！ 人に生まれ変わった」

「やった、やった、人間さまじゃ」

「これで自由に、どこでもいかれる。うれしい、うれしい最高の一日じゃ」

太郎かっぱは、はしぎ回った。

じっと白ひげ仙人はそのようすを見ていた。

太郎かっぱが落ち着いたところで、声をかけた。

「太郎かっぱ。いや太郎。人間になった太郎よ」

「けして忘れるで、ないぞ。悲しい涙のことを」

「それでは、良き人生を送れ、さらばじゃ」

「仙人さま、ありがとうございます。ありがとうございます」

白ひげ仙人は音も無く消えた。

「わあ～これからのことを考えると、わくわくする」

「さあ、人間、人間、人間になるぞ」と叫びながら、太郎は、早速、村をめざして歩き始めた。

いつも、川から見てた一番近い村、厚木村に入った。

厚木村は小さな村であったが、家、家から朝げの煙らが上がり、生き生きとした村人の暮らしが感じられた。川から見ていた、割合、大きなかやぶき屋根の家に入った。軒先に回った。初じめて家の中をのぞいた。

「うあ～人間の家って、こうなっていたのか・・・すげえ・・・」

太郎はずっと立ち止まり、しげしげと家の中を見まして、ひとりで感心していた。この家は漁期には相模川で川魚をとる川漁師で、漁がないときは、田んぼ、畑をやる家であった。

(2へつづく)